

## 持続可能性を考慮したイベントで地域を活性化 「ISO 20121 イベントの持続可能性に関するマネジメントシステム」の活用提案

越川 延明（社団法人日本イベント産業振興協会）

キーワード：持続可能性、ISO 20121、マネジメント、地域活性化

### はじめに

イベントはその性質上、暗黙知やノウハウを集約して事業運営されることが多く、組織より個人に依存する場合が多い。一方、成功事例として取り上げられるイベントは、組織のビジョンの下で、個人が役割に責任を持って活躍していることが多い。

2012年6月にイベントマネジメントの国際標準規格 ISO 20121（イベントの持続可能性に関するマネジメントシステム）の発行が予定されている。ISO 20121は「あらゆるイベント及びイベントに携わる組織」を対象としているが、その中でも地域イベントとの相性が良いと考えられる。それは ISO 20121 の目的が持続可能性の追求であり、地域においても持続可能性が重要な課題だからである。

### 持続可能性を地域ブランドの軸とする

地域の持つ魅力とは有形・無形の文化資本や自然資本を源泉とするソフトパワーであり、地域の魅力を自然と志向する人が増えることで地域がブランド化する。現在、持続可能性を志向する生活者「サステナビリスト」が顕在化していることから、持続可能性が地域ブランドに成り得ることが分かる。

イベントは地域の魅力づくりに大きく作用する。地域の文化資本や自然資本を基に持続可能性を設定し、それを表現するためのイベントを開催することで、地域の魅力をデザインしていくことが可能になる。

ISO 20121 は持続可能性をマネジメントに組み込むために次の特徴を持つ。

1. 社会と共に発展することを目的とする
2. コミュニケーションを重視している
3. 組織体制の確立を目的としている

以上 3 点について、地域イベントに対し、ISO20121 がどのような活用メリットがあるのかについて考察する。

### 1. 社会と共に発展することを目的とする

イベントとは「特定の課題を解決するために行う取組み」である。企業が販売促進のためにイベントを行うのと同様、地域は地域社会における課題解決のためにイベントを行う。それは地域経済の活性化や、文化の継承などを目的としている。

ISO 20121 は持続可能性をイベントマネジメントの軸と考え、トリプルボトムライン（環境、社会、経済）にバランスよく取り組むことで、社会と共にイベントが発展することを目的としている。地域の持続可能性に基づき、イベントの方針を定めることで、地域づくりと両輪となるイベントマネジメントが確立されることが考えられる。

### 2. コミュニケーションを重視している

イベントは主催者、参加者の双方の思いに加え、会場に至るまでの雰囲気やうまく反応

することで成功に結び付く。個々に発生するこれら結びつけるためにコミュニケーションデザインが重要である。イベントがこの役割をうまく果たすことが出来れば活動の質が高くなり、結果として経済効果も増大する。

イベント、地域の長期的な発展を目指すためにも、課題解決に向け、主催者、参加者、地域社会が共に取組んでいく体制作りが ISO 20121 の意図しているところである。

### 3. 組織体制の確立を目的としている

事前に入念な計画を立て、準備を進めても様々なことが起きるのがイベントである。イベントは単発的なものでなく、継続することで大きな意味を持つ。そのため、マネジメントシステムを整え、継続的な改善・発展に向けた PDCA サイクルの確立が重要である。

しかし、地域イベントの課題の一つに担当者の変更がある。前述の通り、イベントは個人の力量に依存する場合が多く、その成功も担当者に左右されることも多い。ISO 20121 はマネジメントを明確にし、誰が担当しても継続的な改善を推進しながら事業運営できる組織の確立を目指している。

### 日本における持続可能性

持続可能な開発における重要な要素は世代間の継承とそれに関する意思決定である。これは残すべきものを選択し、それを発展させるために何をするのかということである。多くの場合、当事者が残したいものと第三者が発展させたいものにはギャップがある。持続可能な開発とはこのギャップを埋めていく活動でもあり、これこそがイベントが得意とする役割でもある。

持続可能性について、日本では「環境配慮」「忍耐」「縮小」などの禁欲的なイメージが強いが、海外では「発展」「ハイテク」など、積

極的な経済成長に結びつくものとして理解されている。持続可能性に関する意識を積極性に向けることで、イベントで表現できる持続可能性は劇的に変化する。

### 活用に向けて

ISO は法律や義務ではない。関係者の意識をまとめ、物事に取り組む際の道具でしかない。しかし、道具であるということは、使い方次第で得られる効果はいかようにも大きくできる。次なる発展の礎をつくる意味でも、持続可能性を考慮したイベントマネジメントに向き合う価値は高い。

地域イベントは特別なことを無理に行う必要はない。「ふつうのこと」を関係者がつくり、地域が支え、参加者が楽しむことで「ふつうのこと」に大きな価値が生まれる。

日本の社会は様々な点で転換期に入っている。イベントのあり方も変わらなければならない。ISO 20121 は持続可能性を考慮したイベントマネジメントシステムである。これを上手に活用することで地域イベントを活性化させ、地域を、そして日本を元気にしていくことができる。

### 参考文献

- ・ ISO/PC250/WG1(2011)「ISO/DIS 20121」
- ・ ディヴィッド・スロスビー (2002)『文化経済学入門』日本経済新聞出版社
- ・ ジョセフ・S・ナイ(2004)『ソフトパワー』日本経済新聞出版社
- ・ 桑田政美 (2006)『観光デザイン学の創造』世界思想社
- ・ ピーター・D・ピーダーセン(2009)『第5の競争軸』朝日新聞出版
- ・ 株式会社電通(2011)『サステナブル・ライフスタイル意識調査』